

10. まことに、主はこう仰せられる。「バビロンに七十年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。
11. わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ。——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。
12. あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。
13. もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。
14. わたしはあなたがたに見つけられる。——主の御告げ。——わたしは、あなたがたの捕われ人を帰らせ、わたしがあなたがたを追い散らした先のすべての国々と、すべての場所から、あなたがたを集める。——主の御告げ。——わたしはあなたがたを引いて行った先から、あなたがたをもとの所へ帰らせる。」

説教

エレミヤによるバビロン捕囚 70 年の預言の後半を学びましょう。

偽預言者が僅か 2 年でバビロン捕囚が終わると言う中で、エレミヤは捕囚が 70 年間続くと預言します。それで、腰を据えてバビロンで生活し、家を建て、家庭を築いて、バビロンの繁栄を祈るよう勧めます。こうして、70 年間という、一人の人間の一生の長さ、三代・四代に至るまで、人々は異教国バビロンでの捕囚生活を過ごすこととなります。しかし、神のさばきによって味わうこととなってしまった苦しい捕囚生活でしたが、その本質は実は単に呪われた災いの生活ではありません。最終的には「わざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのもの」でした (11)。その最終目的は「平和 (シャロム)」です。そこには希望があるのです。後半の預言には、捕囚の期間あるいは捕囚が終了した際の約束が預言されます。

「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」 (12-13) これを文字通りに直訳するところとなります。「あなたがたは、わたしを呼んで歩み、わたしに祈り、わたしはあなたがたに聞く。あなたがたはわたしを探し、辿り着く (見つける)。なぜなら、あなたがたはすべての心でわたしを尋ねる (調査、研究する) からだ。」新改訳のように「～すれば、こうなる」という条件付きの訳も可能ですが、それも一つの解釈です。最も単純に訳すと、「～して、こうなる」という先の訳となります。そうすると、「こうすればこうなる」というのではなく、バビロン捕囚の結果として「こうなり、こうなる」という「平和」の成就をエレミヤが淡々と預言していることとなります。これによると、神にさばかれて命辛々かろうじて生き残った苦しい捕囚生活に於いて、神はイスラエルの前に厳しく立ちはだかります。

かつてはカナンでの恵まれた生活の中で、神なんか必要ないと言わんばかりの傲慢な生活を送っていたイスラエルでしたが、一転、異教の外国での惨めな捕囚生活を送る中で、神を「呼んで歩む」ようになります。そして、神に「祈る」のです。この「祈る」と訳されている言葉は、個人的な祈りにも公の礼拝にも用いられます。かつては馬鹿にしていた神への公の礼拝や個人的な祈りでしたが、今度はまじめに励みます。そうして、かつては彼らを見捨てた神は、今度はその祈りを聞いてくださるようになります。民が「祈り」神が「聞く」とは、神と人との生きた交わりが回復した姿です。そして、「あなたがたはわたしを探し、辿り着く (見つける)」と神は言われます。

なぜなら、「あなたがたはすべての心でわたしを尋ねる（調査、研究する、調べる）からだ」と言うのです。

つまり、何もかもうまくいかない捕囚生活の中で、自分たちの失敗がどこにあったのか、何が悪かったのかを真剣に考えます。そして、調査し研究します。それも片手間ではなく、「心を尽くして」、全身全霊で、総力挙げて神のみこころを探求します。そして、それによって答に辿り着きます。あらためて神を見出すのです。「わたしはあなたがたに見つけられる。」（14）このように、万事うまく行っている時には神を真剣に求めることがありませんでしたが、すべてがうまくいかないことで、その原因を真剣に考え、神を学んで、遂には神を新たに知ることになる、神はそう約束なさるのでした。

私たちに切実に関わることとして、日本の教会の70年を考えてみましょう。日本の教会は敗戦後、伝道のうまくいかないバビロン捕囚の時を過ごしてきました。その原因を考えてみると、戦時下教会が行った罪悪にあると思います。詳しい説明は省略しますが、戦時下、日本のキリスト教会は、神社参拝という偶像崇拝の罪を犯し、アジアへの侵略戦争に積極的に協力しました。要するに、神と人の前に罪を犯したのです。1991年に同盟教団が出した戦責告白「横浜宣言」には、教会の罪責が最も端的に言い表されています。「戦時下、…私たちの教団は、天皇を現人神とする国家神道を偶像問題として拒否できず、かえって国民儀礼として受け入れ、…十戒の第一戒と第二戒を守り抜くことができませんでした。さらに近隣諸国の諸教会と積極的に平和をつくり出す者として生きることができず、国家が推進した植民地支配や侵略戦争に加担し、アジア地域の侵略に協力しました。こうして神と隣人の前に、とりわけアジアの人々に、偶像礼拝の強要と侵略の罪を犯し、しかも戦後、この事実に気付かず、悔い改めに至ることもなく、無自覚なままその大半を過ごしました。」偶像崇拝し、隣国を侵略して、神と人に対して罪を犯した、これが教会の罪責です。そして、この罪責の故に、神の怒りを受け、神のさばきを受けて、バビロン捕囚70年を過ごします。

なぜなら、戦時下のように、偶像崇拝の罪を犯し、隣国を蹂躪して、それでいいと思っているような教会が、もしも神に呪われた70年を過ごさなかったとしたら、ますます愚かになるからです。悪が膨れ上がります。そして、悪と汚れを撒き散らします。偶像崇拝してもいいと人々に教え、国益のためには隣国を侵略しろと教えます。でも、偶像崇拝するような教会は教会とは言えません。偶像崇拝をするキリスト者はキリスト者とは言えないし、それを許す牧師は牧師とは言えません。そんな教会なら無い方がましです。少しも神の栄光をあらわしません。ただの面汚しです。そんな教会を神が祝福するはずがありません。だから、神は教会が栄えないようにしたのです。70年間も捕囚生活を味わわせました。

ただ、一方で、捕囚の70年間、事態を深刻に受けとめて、その原因を真剣に考える牧師や信徒が起こされてきたのも事実です。私に関わっている信州夏期宣教講座や朱基徹牧師記念の集いの働きは、その一つです。バビロン捕囚70年の原因が神と人の前に犯した罪にあるとするならば、教会「再生」の鍵はその悔い改めにあります。「再生」とは、教会が本来のつとめを回復することです。どんなことがあっても偶像崇拝をしない、隣人に仕える、これが再生した教会の新たな歩みとならなければなりません。私自身は、偶像崇拝の恐ろしさを、金宗植牧師という韓国人牧師のただ一度の説教によって思い知りました。その牧師はこう説教しました。偶像崇拝が、十戒に背く、神の最も忌み嫌う罪であり、荒野で二万四千人のイスラエルを一度に殺し、イスラエルの国を滅ぼして70年のバビロン捕囚をもたらして、自分にとっても国家にとっても、本当に恐ろしい神の怒りと呪いとももの凄く苦しみを必ずもたらす罪である、新約の教会に於いても、パウロが「除名」を命じているほど、悔い改めなければ永遠の刑罰に価するほどの罪である。牧会に出て間もない頃ですが、それを聞いて驚きました。一度聞いたら二度と忘れられない強烈な説教です。そして、間もなく、偶像崇拝の罪といのちがけで戦った殉教者を通して、教会と牧師の責任を学びました。

牧会と伝道がうまくいかない中で、教会とは何か、牧師とは何か、キリスト教とは何か、とことん考えさせられます。それで、学びます。聖書から、さらには神学から学びます。そして、16世紀には教会の本質が神のことばにあると改革者たちは考えていたことを知ります。神学校で既に学んでいたことですが、戦時下の教会のことに当てはめると、彼らの失敗の本質ははっきり見えてきました。悪魔に惑わされていい加減な偽預言をしていた、これが教会や牧師のつとめを放棄する決定的な罪悪です。そして、敗戦後もそのような先輩牧師たちが自分たちの責任を曖昧にしながらか教会を指導します。何がどうなっているのかわからないまま、それこそ「戦後、この事実気付かず、悔い改めに至ることもなく、無自覚なままその大半を過ごしました」。良いのか悪いのか、悪いなら何が悪かったのか、誰も教えてくれないのですが、（私が神学校で学んだ「日本基督教史」の教科書には神社参拝問題は全く出てきませんでした）でも、教会の伝道も牧会もなかなかはかどりません。はかどらないので、どうしてかと考えさせられます。学び直します。そういう中で、韓国という外からの強力な助けもありながら、少しずつ少しずつ見えてきました。と言うより、お約束の通りに、「心を尽くして神を捜し求める」者に、神はご自身を現してくださるのです。

ルターは、「教会のバビロン捕囚について」という文書で、当時のローマ教会が悪魔に惑わされてバビロン捕囚状態にあり、特に、そこでは、本来は神の恵みを知らせるはずの礼拝と聖礼典とが、神の恵みを失って、人間の重い鎖のもとに懲役・苦役に喘ぎ苦しむ、バビロン捕囚状態にあることを明らかにして、その回復を訴えました。イスラエルにとっては「バビロン捕囚」は文字通りなのですが、ルターは、教会が悪魔の虜となっていると、「バビロン捕囚」を解釈し直しました。恵みが見えない、神が見えない、人しか見えない、ただ人間としきたりだけで、それが教会だ、キリスト教だ、と言う。これは、暗黒の支配者である悪魔が惑わして、神も恵みも天国も見えなくしているからだ、とルターは考えます。それで、聖書の真理を明らかにすることで、神を見えなくさせている一切の虚飾を剥ぎ取って、人しか見えない捕囚状態から解放されて神を知ることができるよう教会を回復する、これが宗教改革の原点です。

70年もの長きにわたるバビロン捕囚は確かに神のさばきです。しかし同時に、神を知る恵みの時でもあります。70年間、来る日も来る日も呪われながら、神は自分が考えているお方とは違う、これまで先輩牧師や人から学んできたのとも違う、それで一から根本的に学び直します。「心を尽くして神を捜し求め」ます。そうして、調査し、研究することで、真理に辿り着きます。神を見つけます。神が見つけれられてくださるのです。

バビロン捕囚70年を終えるにあたって銘記しておきたいことは、神を正しく知ることです。そして、これをこの世界と後の時代に正しく伝えていく、これが今の時代に生きる私たちの責任だと思います。